

# 初恋を思うべし

南都明日香ふれあいセンター犬養万葉記念館

NO.6 (2017年9月1日号)

なんと今年は犬養孝先生がお元気ならば生誕110年の年。平成10年に犬養先生が逝去されましたが、平成19年には当時岡本館長が犬養万葉顕彰会の会長で、生誕100年記念事業が行なわれたことをなつかしく思い出します。それからはや10年です。節目の年を意識して今年の記念館行事は「犬養先生生誕110年記念事業」と銘打って行っております。4月の「若菜祭」から、今秋の「万葉の歌音楽祭」、「万葉の明日香路に月を観る会」、その他恒例の記念館行事はもちろんのこと、犬養万葉記念館に協力する会のご協力を得て9月末から1ヶ月間、特別展示を致します。催しを通じてみなさまにより深く犬養孝先生に親しんで頂く機会でありたいと願っています。



▲「若菜祭」では犬養先生の教え子のお子様である音楽家古川健太郎・響子さんに「島崎藤村」の歌を歌って頂きました。

## 犬養先生の碑



今回は石川県辰口温泉「旅亭萬葉」の中庭にある碑です。犬養先生の教え子が会社の保養所内に個人で建立されましたが、会社が撤退した後、現在は「たがわ龍泉閣」のご厚意で別館に移設していただき、守っていただいています。歌は能登国歌の「しただみ」の長歌。(59)(巻16-3880)

## 編集後記

★秋の明日香村は光の回廊や彼岸花まつりで大にぎわい。記念館でも若手アーティストの作品展示「飛鳥アートビレッジ」の会場協力をいたします。みなさまのご来館をお待ちいたしております。

## 記念館歳時記



なでしこ

ささやかな万葉植物園として、来館者に万葉歌の季節感をお届けしています。今年の初花は5月23日でした。ひき続き秋の七草がにぎわいます。



犬養万葉100首かるた原画展

未来の子どもたちに万葉かるたを身近なものに…と画家、奥山永見古さんのご協力で50首の楽しい原画展が開催されました。なんと英訳された作品も！



チコンキ・カフェ

脇田宗孝名誉館長と中西久幸講師の案内で、季節ごとに年4回開催しております。9月17日は「初秋の調べ」です。蓄音機の蘊蓄と共にSPレコードで聴く音楽がジャンルも様々で、楽しいひとときです。

## これからの予定

- 9月17日(日)・12月17日(日) チコンキ・カフェ
  - 9月18日(月・祝) 第15回 万葉の歌音楽祭 ※石舞台公園にて
  - 9月23・24日(土日) 飛鳥・光の回廊(記念館21時まで)
  - 9月30日(土) ①万葉植物野外講座 ※甘樫丘バス停10時集合  
②第50回万葉の明日香路に月を観る会 ※石舞台公園にて
  - 9月28日(木)～10月31日(火) 犬養孝生誕110年記念展示
  - 10月7・8日(土日) いにしへ思ほゆ万葉物語(NPO万里奈イベント)
  - 11月 飛鳥アートビレッジ3人展
  - 12月3日(日) 岡本三千代の万葉うたがたりコンサート ※西宮フレンテホール
  - ・毎月1回: 館長万葉講座・なつかしの童謡唱歌カルチャー
- ※詳細については記念館にお問い合わせください。





佐藤榮作総理は1972(昭和47)年7月内閣総辞職した。夫妻は念願の私的な旅行として、翌年の1973年3月24日に奈良を訪れ、翌日に山の辺の道を巡った。犬養先生は「佐藤さんは肩のこらない旅を、ずっと前から楽しみにしておられた。飛鳥だけではなく、山の辺の道の景観を守ることの重要性もしっかり話してくるよ。」と、同行案内する数日前、私に語った。

佐藤氏一行は当日午前中に、円照寺、石上神社、檜原神社・川端康成歌碑を見学した。そこまでの日記文をまず紹介する。

⑦昭和48(1973)年3月24日 土

奈良に遊ぶ日で、早朝食抜きで東京駅にかけつける。八時半発の「光」に間に合ふ為七時半出発の用意はしたが、結局七時五十分世田谷出発。……五時すぎ、奈良ホテル旧館に泊。来客多く賑やか。

⑧3月25日 日

ホテル発九時半。……犬養[孝]先生や高田[好胤]薬師寺管長等が一行で賑やか。まづ、円照寺(三島[由紀夫]君の小説では月照寺か)を訪問。石上神社にも参詣。宮家からの尼さん。寺宝として明治大帝の御妹御の軸物を拝観。次は檜原神社で川端先生の記念碑を見る。大和三山を一望におさめる絶好の地。生前、場所を選定され碑文の文言はしらして貰ったが、未亡人の厚意で先生原稿の中から一つ一つ文字を選んで揃へられた由。

檜原神社の西に位置する井寺池の堤に、『古事記』歌謡碑「大和は國のまほろば たたなづく 青かき 山ごもれる 大和し 美しが、1972年11月5日に建立除幕された。川端康成は故人となっていたので、「美しい日本の私」の原稿より集字となった。

犬養先生はこの時の思い出を次のように記している。「わたくしは、黛敏郎君と二人で、奈良ホテルにおむかえし、クルマの中では四人、歓談と説明に尽きることなく、たのしく山の辺の道を南におかっていた。……誰もいない池のほとり、四人は天にもひびけと大きい声でうたった。佐藤さんは五高の察歌が、黛君には中学の唱歌がよみがえったにちがいない。人生のわき道の、生(き)のままの人間の歌声は、いまも高らかに空にひびけているようだ。」「私の会った人—情熱を燃えしめよ(五)—」『朝日新聞(夕刊)』1977年6月30日。所収『わたしの道 萬葉の道—犬養孝先生を祝う—』犬養孝先生を祝う会、1978年。

後日、その時の様子を先生にお聴きした。倭武尊の歌謡、額田王の三輪山の万葉歌(巻1-18)などを皆で朗唱したあと、旧制第五高等学校の察歌「武夫原頭」を犬養先生の提案で大声を出して歌った。佐藤さんは感極まって目に涙を浮かべた。護衛付きの公的な視察の旅では、とてもこのようなことは出来なかつたらう。

続く午後の出来事を、日記は次のように記す。

⑧次は天理教。真柱[中山善衛]に初めて会見。……食事[後]立ち上った際、足がしびれてか、ぼったり転倒。然し、別に異状を感じないので天理教内の参拝や記念館の拝観など時間を費し、次は薬師寺に行く。東西の塔の建立と本堂の建立に力を注いでおられる。寺内の拝観や景観等賞し、更に、御茶席で管長の愛嬢の御点前で御茶を戴く。薬師寺に別れをつける直前に「長老[橋本凝胤]」におめにかかる事が出来、大変しあわせた。然しその頃から足に異状を感じ、夜食の際医師の診断を受け、応急手当をする。左足くるぶしから水をとおり、且又左足外側に痛みを感ずる。宿に帰ってから、明日の日程をとりやめまづ帰京、更めて足の痛みの診察をする事に決する。

3月26日には飛鳥を巡り、もう一度甘樫丘に立って眺望し、飛

鳥寺や石舞台などを訪ねる予定だったが中止となった。夫妻は旅の中断を大変残念がった。10時半に佐藤さん一行は奈良ホテルを出発した。犬養先生と黛氏が見送った。佐藤氏は京都経由でそのまま自動車に乗って帰京し、寛子夫人と林秘書は新幹線ひかりで一足先に帰京した。その夜の検査で、左くるぶし骨折が判明した。翌27日は佐藤氏の満72歳の誕生日。高田好胤師がお祝いとお見舞いで佐藤邸を訪問している。また、4月16日の川端康成の一周忌には、寛子夫人が東京会館に出向いている。

飛鳥に関する記述は『佐藤榮作日記』にさらに続く。10月には高松塚古墳を見学し、念願の飛鳥再訪が実現することになった。この時犬養先生は同行していない。

⑨6月15日 金

次は岸下[利一]村長並に村議等が来て、明日香保存の状況等並に今後の対策を話合ふ。奥野文相や奥田知事等と対策を十分に研討(ママ)する事、それが地域住民の為ばかりでなく次の時代への尊い贈物となる事等意見の交換をする。

⑩6月25日 月

奈良の奥田知事が明日香村の保存会々長の松下幸之助君代理人と一緒にやって来て高松塚の壁画のうつしを屏風に作りなほしてもって来る。立派なものである。然しお部屋がない。鎌倉にもって行けばいいと思ふが汐風も気になる。どうしたものかと案ずる。

⑪10月5日 金

最後に明日香村研究の末永[雅雄]博士がやって来る。高松塚古墳の話をもって来る。今月十三日頃には見物出来るらしい。

⑫10月13日 土

一巡して知事と別れて高松[塚]古墳の見物に車を走らす。古墳見物は初めての事。説明はその道の猛者末永文博。古墳の中をのぞき見て古代美人と対面。南口から中を見る。南北の長方形の古墳で壁画や天井の星座等なかなか面白い。然し勿論専門的な知識もない小生、たゞ民族の遺産を保存、大事にする事のみを願ふ。朝鮮の風俗か。木棺は見物出来なかつたが、末永博士から鏡その他の写真を中食の際見せられる。

(以上、『佐藤榮作日記 第五巻』1997年)

次の記述は、日記に登場する最後の飛鳥関連記事である。

⑬昭和49(1974)年8月30日 金

夕方六時、高田好胤師が黛敏郎君と一緒に来る。大した事ではないが明日香村その他で、開発を後にして保存の為やすい金利の金が欲しいとの事。明日大蔵銀行局へ電話して対策をたて見たい。

(『佐藤榮作日記 第六巻』1999年)

黛敏郎氏は作曲家で、犬養先生の神奈川県立第一中学校の教子。薬師寺が主宰する「日本まほろばの会」の講師を、犬養先生や高田師と共に各地で務めた。⑫の記事は、高田・黛両氏が、飛鳥保存応援の重要な役割を担っていたことを示す貴重な史料である。

2013(平成25)年4月21日、自由民主党と民主党は「飛鳥古京を守る議員連盟」を再発足させた。飛鳥・藤原・平城の地は後世に残すべき歴史文化遺産である。佐藤総理のような政治の力もあったが、村民や「飛鳥古京を守る会」に結集した全国の大勢の人々の熱意が、巨大なうねりとなって飛鳥保存問題を前進させていった。犬養先生は佐藤総理への恩義を終生忘れなかつた。

《次号に続く》